

## 図解 社会空間モデル試論

渋谷 昌三

大学の構内や歩道などで、知人に出会ったとき、立ち話の始まることがある。立ち話のとき、2人間の距離はどのくらいで、2人のそれぞれの身体の向きはどうなっているだろうか。あるときは、近くの喫茶店に入ることもなる。喫茶店で2人のすわる位置はどうなるであろうか。

2人の人がどれ程の距離をとって、どんな向きで話をするかは、この2人の相手に対する態度の心理的尺度の一つと考えることができる。本論文では、対人間の距離と身体の向きが対人関係のあり方とどのように結びついているかについて、機構的な側面から検討しようとするものである。主として、二者間の関係を社会空間というモデルを提案して考えてみることにする。本論文で使用する社会空間とは、2人の人が何らかの交渉を持ったときに生じる対人交渉の空間を意味する。なお、人の行動にみられる空間の概念については渋谷(1975, 1976)の論文を参照していただきたい。(注1)

### I. 社会空間モデルの提案

#### § 1. 社会空間の概念

2人の人の作る社会空間の概念を次のように捉えることを提案する。

2つの個体が作り出す社会空間は、2つの個体を中心とした対人交渉エネルギー

ギー(注2)の層から形成されている。この層は、個体の前方に広く、後方、両側方向に狭い玉子型をしている個人空間をその基礎としてできあがっている。また、対人交渉のエネルギーは、2つの個体間の距離および身体の方角から感知される凝集力（たとえば、親密度）に規定される。

人は他の二者が作る社会空間に対して、意図的なあるいは無意図的なある種の反応行動を示す。それには、緊張や不安を低減するための防衛行動や交わりたいと望む親和的行動などが考えられる。具体的には、社会空間と自分との間に一定の距離を保つたり、自分の身体の方角を変えるなどの行動がみられる。人のこうした行動は、対人間の距離と eye-contact が相補的關係にあるとする Argyle, M. と Dean, J. (1965) の考え方 (The Affiliative Conflict Theory) とも類似している。

人にこうした反応行動を生起させる一要因として、社会空間を形成する二者の作り出す対人交渉エネルギーの存在が考えられる。この対人交渉エネルギーは社会空間を構成する二者間の距離と相互の身体方角から感知される凝集力に規定されており、同時に、社会空間をとりまく外界への影響力をもっている。たとえば、社会空間を構成する二者がきわめて親密であると感知されているとき、そこにはきわめて強い対人交渉エネルギーが外へ発散されていると考えることができる。

そして、この対人交渉エネルギーの他者（非メンバー）への影響力は、非メンバー自身の持つ特性と空間を構成する二者（メンバー）とその非メンバーとの間の距離および非メンバーとの身体の方角のいかんによって変化するであろう。

社会空間は、2人の構成員を中心として、中心から外に広がるにつれ弱まるような対人交渉エネルギーの層から構成されている。この層は静止した水面に落とした小石のまわりにできる波紋に似ている。

以上のような社会空間はいくつかの個人空間から形成されると考えることにする。本論文では、2つの個人空間で作られた社会空間を扱うことにするが、社会空間はそれを構成する基本的空間—すなわち個人空間の数が多くなるにつれてより大規模なものとなるのである。

## § 2. 個人空間の構造

Hall, E. T. (1966) は、アメリカの北東沿岸生れの人々の間に密接、個体、社会、公衆（それぞれに近接相と遠方相がある）という4つの距離帯のあることを見出ししている。また、Horowitz, M. J. (1968) は、他の人が八方から身体に接近するとその個体は特定の距離帯（body-buffer zone と呼んでいる）を保持しようとするを明らかにしている。この zone は前方で広く、両側方から後方にかけて狭くなっている。

そして、田中 (1973) は個人空間の異方的構造を実験的に確認し、身体を中心とした刺激値の布置を示すモデルを提案している。このモデルでは、前方、とくに正面について曲線が疎で刺激値の勾配が緩く、後方、とくに、真後について曲線が密で勾配が急であるような、前方に広がった楕円に近い形が考えられている。

以上の研究例から、個人空間の構造を次のように考える。すなわち、個人空間は個体の身体をその中心とした4つ程の層から構成され、前方に広く、両側方から後方にかけて密になった玉子型（変則的な楕円形）をしている。この個人空間は Fig. 1 のようなモデルとして示すことができよう。

Fig. 1 の各空間の名称は Hall (1966) に従って便宜的に設定した。名称を改めたのは Hall の距離に対して本論文での空間の概念を明瞭にするためである。各空間の持つ意味を Hall に擬すると次のようになる。

親密空間とは、ごく親しいあいだから（たとえば、恋人、夫婦、肉親、親友など）の人どうしに限って侵入が許される空間領域である。この空間は人 P

Shibuya	Hall, E. T. (1966)
1 : 親密空間	密接距離 (18inchesまで)
2 : 交渉空間	個体距離 (1.5-4feet)
3 : 形式空間	社会距離 (4-12feet)
4 : 公衆空間	公衆距離 (12feet以上)

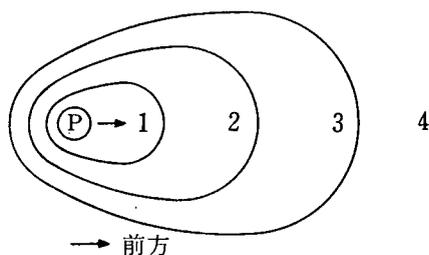


Fig. 1 Personal Space Model

(Pという個人空間を持つ人)にとって、最も不安で危険な領域である。

交渉空間では、個人的な交渉が行なわれる。知人との混み入った会話や日常の会話などに使われる空間である。

形式空間は、個人的でない用件のときや仕事上の事務的な報告、社交上の集まりなどのときに使用される空間領域である。

公衆空間は、講演や演説などの公的な機会に使用される領域であり、他者との個人的な交渉は望めない。

以上のように各空間での意味は異なっており、内側から外側に至るにつれて、つまり、他者との間の距離が遠くなるにつれ、人Pの放出する他者への影響力は弱まってくる。したがって、他者からの人Pへの影響力も弱まると考えられる。また、空間の広がりの方角<sup>(註3)</sup>は人Pの積極的な対人交渉の方向性をも示していることとする。このような個人空間の広がりや空間の分化は、人格的要因や発達の問題と関係があるであろうし、文化や人種によっても異なっていることが考えられる。人格との関連性についてはⅡ節で扱うこととする。

本論文では、上述したような個人に特有な個人空間ではなく、主として、一般的で典型的な個人空間を対象として考察を進めてゆくこととする。

### § 3. 社会空間モデルの提案

以上のように個人空間が説明されるのであれば、社会空間は次のようなモデルで説明できるであろう。

一般に、人A（Aという個人空間を持つ人）と人B（Bという個人空間を持つ人）が出会うと、人Aと人Bを中心とした社会空間が形成される。この社会空間は、それぞれの個人空間とは異なる4つの対人交渉エネルギーの層を新たに構成する。

以下で説明するモデルでは、人Aと人Bの個人空間はほとんど同じで、しかも、人Aと人Bの相互の好意度も同じである場合を扱うこととする。以下の例は論理の展開を簡略化するためのモデルであり、実際場面には該当しにくいものである。

<例1>人Aと人Bが親密空間に包摂されるとき

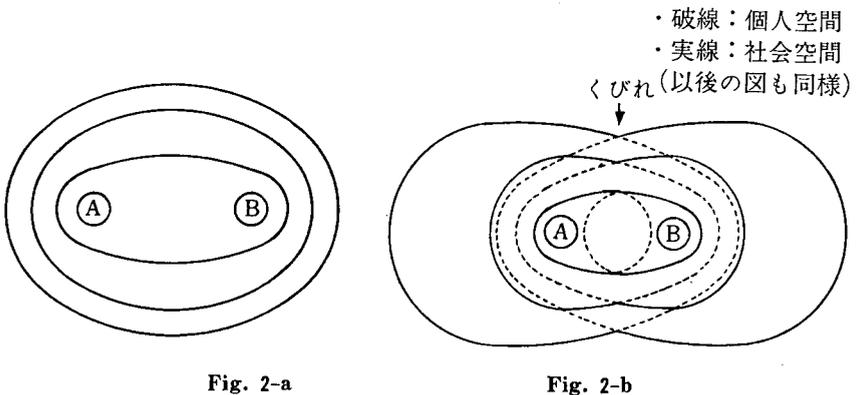


Fig. 2-a のときは、A と B は同一のなめらかな楕円に包まれた社会空間を形成している。A と B はお互いの親密空間に完全に含まれており、最も親しいあいだからの状況を示している。他者のこの社会空間への侵入はきわめて困難であり、A と B の関係はきわめて緊密である。

Fig. 2-b のときは、A と B はお互いの親密空間に包まれてはいるが、両者間の距離がやや遠くなり、社会空間に「くびれ」が出現している。このくびれは、A と B の親密な関係を崩壊へと導くものであり、一方、他者の社会空間への侵入を許す前兆ともなる。しかし現在のところ、A と B はきわめて親密な関係にはある。

### <例 2> 交渉空間に包摂されるとき

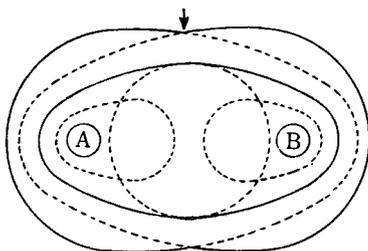


Fig. 3

人Aと人Bがお互いの交渉空間に包まれるときは、Fig. 3 で示すように、親密空間は個人空間のときのみである。AとBの相互交渉は交渉空間の範囲内で行なわれる。例1に比べ、「くびれ」はより深く、包摂の空間はより薄くなり、AとBの関係は不安定さを増している。したがって、お互いの関係を断つことが比較的容易になり、外からの侵入も楽になっている。

<例3>形式空間に包摂されるとき

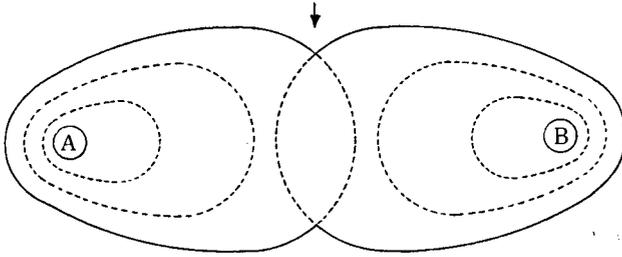


Fig. 4

AとBの交渉は形式空間の範囲内で行なわれ、相互の親密さはきわめて稀薄であり、不安定な関係を示している。個人的な交渉は生じにくい状況にある。「くびれ」は一層深くなり、包摂の空間はより一層薄くなって、外からの侵入は容易になっている。二者間の関係は崩れやすくなっている。

<例4>公衆空間に包摂されるとき

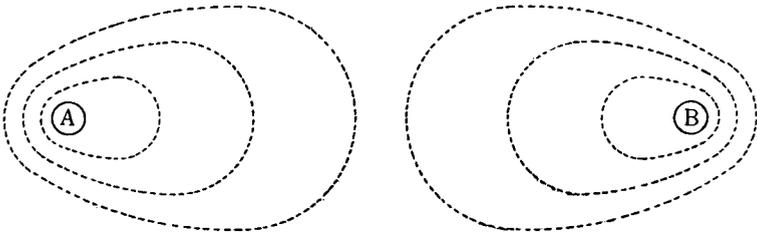


Fig. 5

講演の際などにみられる空間の形である。話し手と聞き手の空間の方向は一致しているが、相互交渉は生じていない。まれに交渉の生じることはあっても、継続することはない。

<例5> 相互が交渉を望まないとき

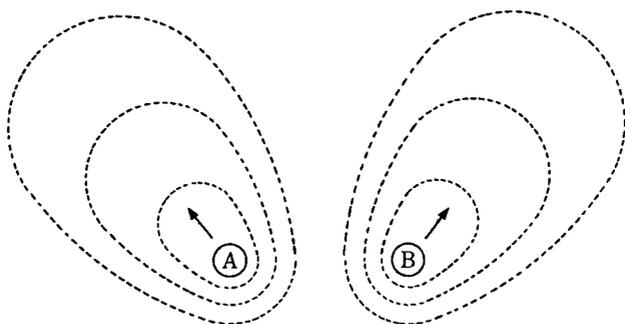


Fig. 6

AとBの二者間の距離が近い場合で、相互が交渉を望まないときには、空間の広がりの方角を変えることにより、より内側の空間への包摂を回避することができる。ここでは、お互いが「そっぽを向く」という状態が生じている。

以上が社会空間モデルの概説である。個人空間と社会空間の関係の概要が説明できたと考えられる。また、二者がどのような関係にあるかによって、あるいは、どのような関係を望むかによって社会空間の異なることがモデルを通して明らかにされたと思う。例では単純な場合しか説明されていないが、こうしたモデルが実際にどのように適用できるかについて次節で検討する。

## II. 社会空間モデルの応用

社会空間モデルの理解を深めるために、本モデルを使って、いくつかの研究結果を説明してみたい。

### § 1. 立ち話への侵入

Cheyne, J. A. と Efran, M. G. (1972) は2人の子供の間の空間の強さを検討した。彼らは通行人(被験者)が2人(サクラ)の間(41 inches  $\approx$  102.5cm)を

通過する割合を調べた。実験条件は廊下で立ち話をしている(相互交渉がある)か、そこから階下を見ている(相互交渉なし)かであった。この結果、(1)相互交渉にある状況で、また(2)相互交渉の有無にかかわらず男女の組み合わせの場合に、他の条件に比べ2人の間を通過しないで回避する人が多かった。さらに、彼らがショッピングセンターで行なった結果では、(3)相互交渉にある2人の距離が個体距離(約45~120cm; Hall, E. T. 1966)のときに他者の通過を阻止する働きの顕著であることがわかった。

Fig. 3 は相互交渉のある2人が個体距離(本論文では交渉空間に包摂)にいたる様子を示している。この状況では、2人が個体距離の外にあるときに比べ(Fig. 4 参照)社会空間の層が厚く、外からこの空間に割り込むのが困難であることがわかる。また、2人の間に相互交渉のないときは社会空間が形成されておらず(Fig. 6 参照)外からの侵入は自由である。以上のように、相互交渉にある2人の間の通り抜けを回避する通行人の行動を説明できるのである。

結果の(2)で、相互交渉のない男女の組み合わせで他者の通過を阻止する働きの強かったのは興味深いことである。本モデルではうまく説明できないが、男と女が同じ場所にいる(しかも2人だけで)ということだけで、その状況に二者間の特別な相互関係を通行人が想定していたためではないだろうか。

## § 2. 座席の選択

Sommer, R. (1967) は小集団の生態学的見地から人の座席のすわり方の研究を行なっている。人は他の人との出会いの目的に従って座席の位置の選択を行なっているのである。彼の研究の結果に本モデルを適用すると以下のようになる。

(1) 2人が交わりたいと望むなら、テーブルの角をはさんですわる。

Fig. 7-1 では対人交渉エネルギー層は不安定な状態にある。ここで、2人

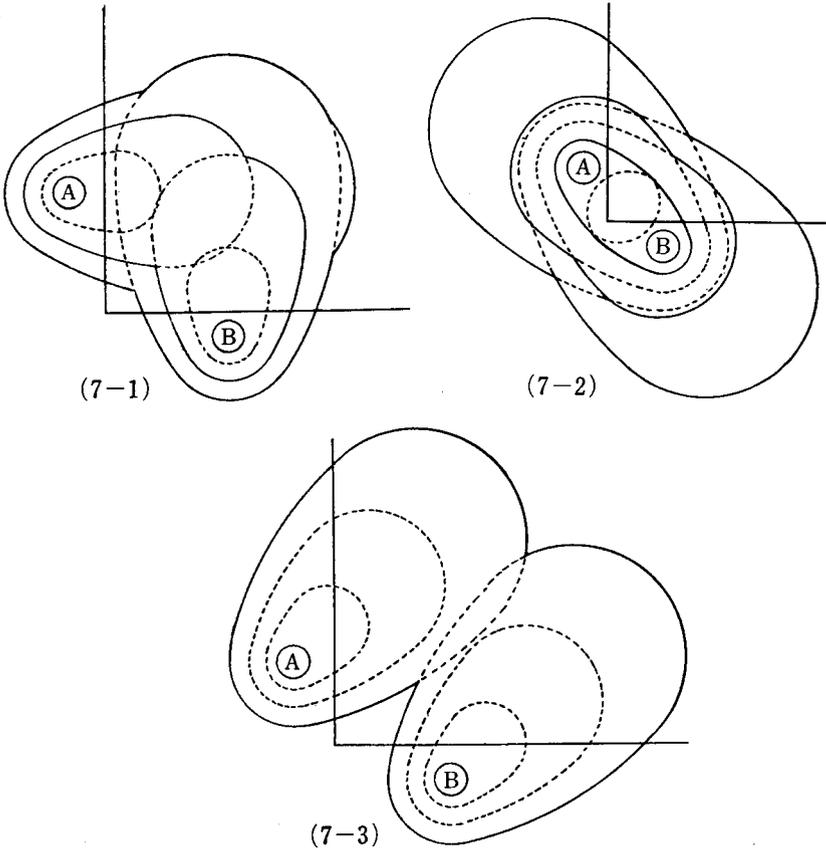


Fig. 7 個人空間の軸の回転

がより一層の親密さを望むならば、AとBの個人空間の軸(註4)は同一直線上に並ぶようになる (Fig.7-2)。つまり、AとBは相互のより親密な空間に包まれ、より安定した社会空間が形成される。一方、交渉をやめたいときには、AとBの個人空間の包摂をできるだけ薄くすればよいのである (Fig.7-3)。その結果、より不安定で壊れやすい社会空間が形成され、交渉は終りへと向かうのである。

以上のような状況では、個人空間の軸の回転が2人間の関係の調整に役立っていたと考えられる。たとえば、より親密な交わりを望むときは体を相手の方向に向けて話すであろうし、話を打ち切りにしたいと思うときには相手とは別の方向へ（たとえば出口に向けて）体を向けるであろう。話し相手の膝の向きがその人の本心を伝えていることがある。

(2) 対立していると向かい合ってすわる。

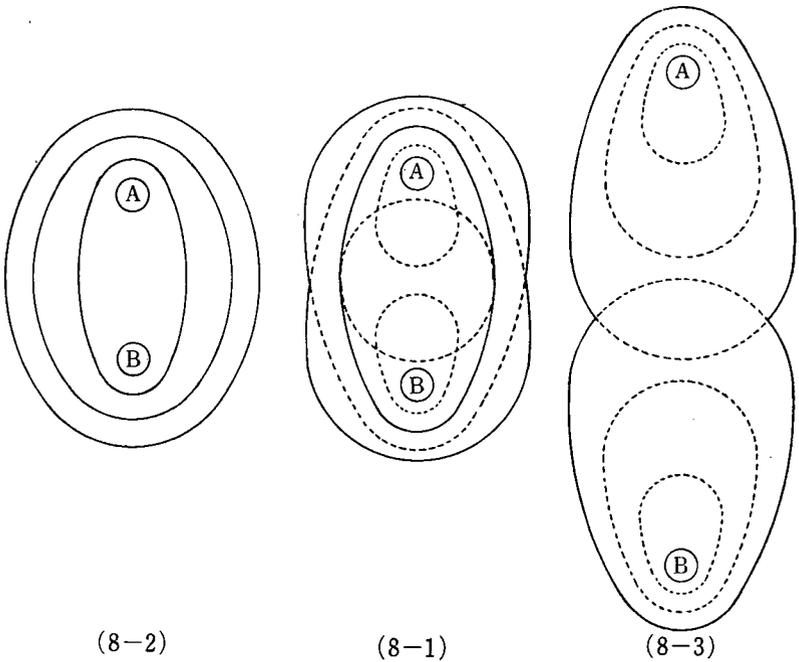


Fig. 8 個人空間の軸上の移動

2人が対立しているという状況は、もともとこの2人は親しいあいだがらにあると考えられる (Fig. 8-1)。2人の関係がその後の交渉によっては、きわめて親密になる (Fig. 8-2) こともあるだろうし、疎遠になる (Fig. 8-3) 可能性もある。こうした状況は、社会空間の軸上での個人空間の移動の問題と

捉えることができる。

たとえば、なるべく相手と交渉をもちたくないようなときとか激しい対立が生じたときには、体をびんと張るとか少し後にそり返って2人の間の距離を遠くする。反対に、相手に強く引かれたときには、前こごみになって相手に近付こうとするのである。

(3) 協応的であると並んですわる。

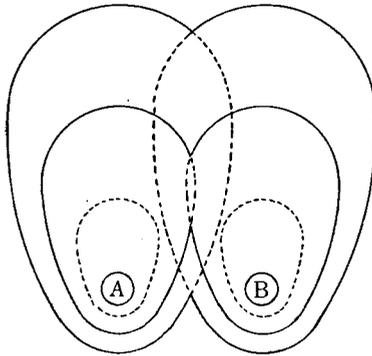


Fig. 9

並んですわると個人空間の軸の方向は互いに平行となる。この状況では、AとBは空間的に接近しているにもかかわらず、包まれる個人空間は比較的外側の層になっているのが特徴的である。したがって、AかBの個人空間の少しの移動によって、きわめて親密になったり、疎遠になったりすることができる。親しい人どうしが図書館で勉強するのに利用すると便利である。2人は別々に勉強に熱中することもできるし、何か教えて欲しいときには体をごくわずか移動することによって親密な交渉が成立するからである。

(4) 全然交渉を望まないならできるだけ遠くにすわる。

他者からできるだけ遠くにすわるのは、形式空間や公衆空間を利用して交渉を避けようとする意図のあらわれである。これらの空間に包まれていれば、た

とえ交渉が生じたとしてもすぐに壊れるから好都合なのである。たとえば、あまり顔を合せたくない人と同席する場合にはできるだけ（不自然にならない程度に）遠くにすわるのである (Fig. 5)。

上述したように、個人空間の軸の回転と軸の移動という機構は、2人間の相互の関係を調整するのに役立っていると考えるのが便利である。この両機構がどのような関係にあるのかについての予測は立たないが、社会空間モデルの機構を説明する中心概念となりそうである。

### § 3. 個人空間モデルの適用

——情況的パーソナリティとしての個人空間について——

人にみられる距離帯と情況的パーソナリティの関係について Hall, E. T. (1966) は次のように述べている。「内向型と外向型……等々といったさまざまなパーソナリティの彩どりや段階があるばかりでなく、我々の一人一人が多くの習得された情況的パーソナリティを持っているのである。情況的パーソナリティのもっとも単純な形態は、密接的、個体的、社会的、公衆的な相互作用に応えるときのものである。パーソナリティの公衆的位相を発達させることができず、そのため公衆的空間を占めることのできない人々がいる。……多くの精神病医が知っているように、密接的、個体的な距離帯で困難を覚え、他人と接近するのに耐えられない人々もいる。(日高, 佐藤共訳 163頁より)」

個人空間モデルを利用して情況的パーソナリティを考えてみることにする。本論文では情況的パーソナリティに対峙するものとして固定的パーソナリティを設定する。固定的パーソナリティは情況的パーソナリティが習得された特性であるのに対し、その人の本質的な外からは変えにくい特性と考えておく。

人Pは固定的パーソナリティに直接とりまかれ、その外側に情況的パーソナリティの層（たとえば、Fig.1 では4つの空間領域に対応する）がある。情況的パーソナリティとは人と人との出会いの際にみられる行動特性と捉えておくことにしたい。

情況的パーソナリティにおける個人差は、主として2つの機構によって決まると考える。第1は、4つの領域の「分化」の程度であり、第2は、4つの領域の「広がり」の範囲である。分化とその広がりとは、対人関係を調整し、持続させるのに役立つ。たとえば、年少者は領域の分化が不十分のために、成人のような人付き合いができないのであろう。また、対人恐怖を持つ者や分裂病患者(損傷された距離概念を持っている; Sommer, R. 1959)は、この分化が不完全で、しかもその広がりにも異常があるのではあるまいか。

田中(1973)の実測によれば、接近条件の場合、内向型性格群は外向型性格群の約1.6倍の距離(「近すぎて気詰まりだ」と感じる位置)をとっていた。そして、彼女は、内向群と外向群の個人空間は方向に関する基本的な構造は同じであるが、その大きさについて異なっていると述べている。

田中の見出した「近すぎて気詰まり」な位置が密接空間との接点であると仮定すれば、次のような理解が可能であろう。つまり、内向型の者は、外向型の者に比べ、密接空間の空間領域が大きく、その結果としてより大きな対人交渉のための距離帯を必要としたのである。

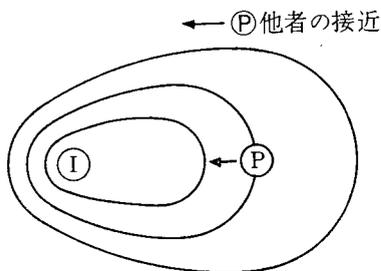


Fig. 10-a 内向型

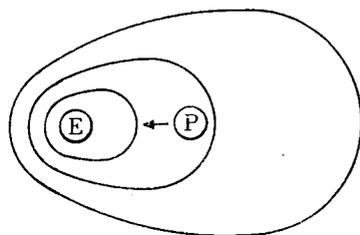


Fig. 10-b 外向型

Fig. 10が示すように、内向型の密接空間は外向型に比べて大きいので、たとえば、外向型の者の矢印の位置(交渉空間)に他者がいる場合には、内向型の者にとっては密接空間に他者が侵入してことになる。交渉空間内

での侵入を許すとすれば、内向型の者は外向型の者に比べて、他者との間により大きな距離を必要とすることになるのである。

以上、情況のパーソナリティにおける機構を検討してみた。ここでは、人の他者との出会いの際にみられる行動特性(主として対人間の距離を指標として)の個人差にふれた。いわゆる性格(固定的パーソナリティ)そのものの理論的機構については今後の課題として残ったが、Lewin, K. (1935) 流の場理論的力学観が採用できるものと考えている。

### Ⅲ. おわりに

広義の Nonverbal Communication の一つである対人間の距離と身体方向を対人関係のあり方の中で考えてみた。本論文では、主として機構的側面から対人関係の力動性にふれた。そのための一つ的手段として、社会空間モデルを提案した。このモデルはまだ実証されておらず、不明確なところや無理のあるところも多い。しかし、人にみられる距離帯や空間を扱う場合に有効な点のあることを本論文で検討した。

私的見解を中心とした論文であったが、様々な叱責をいただければ幸いである。

- (注1) Hall, E. T. (1966) や Sommer, R. (1969) の翻訳本が、また望月衛 (1976) の著書もある。
- (注2) 対人交渉エネルギー：対人交渉を積極的に押し進めるような力の源泉を便宜的にこのように呼ぶこととする。
- (注3) 空間の広がりの方は、他者との交渉を望むときはその相手に対し垂直に近くなり、したがって、身体は相手に直面することになる。Fig. 7-2 参照。
- (注4) 個人空間の軸の方は、個人空間の広がりの方と同じ意味である。(注3) 参照。

REFERENCES

- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye-contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304.
- Cheyne, J. A., & Efran, M. G. 1972 The effect of spatial and interpersonal variables on the invasion of group controlled territories. *Sociometry*, 35, 477-489.
- Hall, E. T. 1966 The hidden dimension. Double day and Company. 日高敏隆・佐藤信行 (共訳) 1970 かくれた次元 みすず書房
- Horowitz, M. J. 1968 Spatial behavior and psychopathology. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 146, 24-35.
- Lewin, K. 1935 A dynamic theory of personality. McGraw-Hill. 相良守次・小川隆 (共訳) 1957 パーソナリティの力学説 岩波書店
- 望月衛 1976 個人空間の中で一飲食住の心理 プレーン出版
- 渋谷昌三 1975 人の空間行動. 学習院大学哲学会誌, 3, 88-112.
- 渋谷昌三 1976 社会空間の基礎的研究. 心理学研究, 47, 119-128.
- Sommer, R. 1959 Studies in personal space. *Sociometry*, 22, 247-260.
- Sommer, R. 1967 Small group ecology. *Psychological Bulletin*, 67, 145-152.
- Sommer, R. 1969 Personal Space. Prentice-Hall. 穂山貞登 (訳) 1972 人間の空間 鹿島出版会
- 田中政子 1973 Personal Space の異方的構造について. 教育心理学研究, 21, 223-232.